丸山真男×埴谷雄高×加藤周一 『週刊読書人』1960

(昭和35)年１月１日号

一年の後十年の後

黄金の60年代か危機の60年代か

丸山 眞男(政治学者、思想史家)
埴谷 雄高(作家)
加藤 周一(評論家)

朝鮮戦争ではじまった一九五〇年代は、月ロケットとアイクーフルシチョフ会談でその幕を閉じた。過ぎ去った十年間、平和は細い一本の糸でかろうじて支えられていたといえる。

そしていま、世界史の歩みは一九六〇年代に入った。これから迎える十年間は、戦争か平和か、危機の時代か黄金の時代か－そこには、今日に生きるひとりひとりの責任が問われる大きな問題が横たわっている。新しい年を迎えて、本紙では、向う一年間と向う十年間という区切りで、六〇年代の展望を埴谷雄高（作家）、丸山真男（東大教授・政治学専攻）、加藤周一（評論家）の三氏に話し合ってもらった。

目　次

第１回　共存と緊張緩和へ　競争の舞台　低開発地域に

第2回　帝国主義は変ったか　現在の指導者　大半は死ぬ

第3回　保守化したソ連　平和産業へ　転換は可能か

第4回　勘の鈍い米、ソ両国　新しい軍備　市民の武装に

第5回　革命への現実主義　イデオロギー　多様化は当然

第6回　憲法は護られるか　問題のカギ　中間層の動向に

第１回

共存と緊張緩和へ　競争の舞台　低開発地域に

二つの世界

編集部

向う一年間、向う十年間というふうに考えると、一番の問題は安保条約の問題じゃないかと思われるので、そこらから日本と中国との問題とか、Ａ・Ａ諸国と日本、Ａ・Ａ諸国と中国の問題とか、アメリカの政策の問題とか、ソビエトの政策の問題とか、そういうのを全部ふまえた上で平和共存の問題というようなところへ話を進めて行っていただけたらと思うんですけれど……。

埴谷

加藤くんは安保改定問題を熱心にやってるから口切りをどうですか。……

十年というと分らなくてね、大体、無責任な放言みたいな話になるけど、一年ぐらいなら幾分緻密に見通せるんじゃないですか。

丸山

しかし、逆の面もあるんだよ。一年ぐらいが一番むずかしいという。（笑）これから数年間の大ざっぱな傾向っていうのは分るけど、この一年に何が出てくるかということになると……。

埴谷

改定される安保条約は今年締結されるわけでしょう。

加藤

今年の初めに調印して、春に批准するかどうかということですね。ふり返ってみると、日本が無条件降伏占領という状態からサンフランシスコ条約を結んで一応独立国になるということ、それが冷たい戦争の一番激しい時に行われた。安保条約はそういう状況の直接の反映です。ところが世界全体として六〇年代には、五〇年代の冷たい戦争と別の考え方の上に、国際情勢が発展する可能性が強くなってきた。そこでもし今、日本政府がみずからすすんで安保条約を改定すれば、実質的に五〇年代の政策的方向を強め、固定するということになる。

冷戦の考え方を六〇年代に延長しようとすることに無理がある。これが安保条約改定問題の一番の要点じゃないか。情勢の変化を理由にたくさんあると思う。その一つは五〇年代の終りになって、核兵器とその運搬手段に関し、ソ連の技術が発展して力の均衡が生じたことでしょう。それが一つの条件だと思うんです。もう一つ、五〇年代に起った大きなことは、戦争の強い打撃を受けたソ連でも中国でも、五〇年代には回復の傾向が顕著で、十年間たってみると経済的な発展の早いことがあきらかになった。それが二番目の大きな要素ですね。

そういう二つのことが冷たい戦争の論理を推し進めることを困難にしてきたんで、どこかで考えを切替

える必要が起ってきたんじゃないか。別な言葉で言えば、六〇年代になって、フルシチョフの訪米に現われたような新しい考え方が、元へ戻るということは——小さな波としてはあるでしょうが——全体としては私はないんじゃないかと思うんです。

埴谷
　さっき「十年より一年のほうが観測がむずかしいんじゃないか」という話があったけど、ぼくなんかもそうで、できるだけ大きく見たほうがやりよい。（笑）

丸山
　埴谷さんのは十年どころか三世紀ぐらいじゃないの。（笑）

埴谷
　十年よりむしろ半世紀ですね。というのは、ぼくの感じでは、二十世紀後半は、帝国主義がどう変質するかという問題になる。これはすでにソビエトの平和共存が帝国主義戦争不可避ならずという考え方と資本主義国は軍事産業なしにも成り立ち得るという見解に裏打ちされて現われてきている。これはソビエトという体制における帝国主義の理解ですね。

ところが、これはソビエトの理解であって必ずしも社会主義全体の見解であるかどうか分らないんです。というのは、中国では香港とかマカオというまだ植民地形態をとってる——小さい部分であるけれども——部分があって、台湾がまた現在のような状態にあると必ずしもソビエトと同意見であるとは思われない。ということは、今後十年の裡にソビエトと中国との間に帝国主義について意見の相違が生ずるかもしれないということですね。それから生ずるかもしれないその意見の相違を、アメリカがどういうふうに受止めるかということも日本の安保条約改定の未来に含まれてくるんじゃないかと思うんです。

加藤君の言うように、世界の大勢は進められて行くでしょうけれど、じぐざぐはかなりあると思いますね。これは今の理論的な面ばかりでなく、東南アジアの独立諸国および北鮮などに対する主導権という問題もあって、これはかなりむずかしいことになるんじゃないか。そして六〇年代はこの社会主義内部における発展の変化による意見の相違がかなりはっきり出てくる時代じゃないかという気がする。というのは、人民公社ですね。これは単に生産力の増大という面ばかりじゃなくて、軍事的な面でも重要な要素をはらんでる。これが今後十年のうちにどうなるかということを考えれば、帝国主義に対する対立の面がかなり増大してくると思う。

核兵器時代における人民公社が軍事的にどういう力を持つか、ちょっと矛盾したように見えるけれども、朝鮮戦争で負けなかったというファイトが後押しするとどの程度まで伸びるか、これは重大事でしょうね。

加藤

中国のなかの問題というのは私にはむずかしい。人民公社を中心とした中国が今後十年間にどういう方角へ発展するか。ダレス氏の考え方は、二つのことを前提としている。一つは共産主義政権は弱いものだということ。人気がないから容易にひっくり返せるだろうということ。もう一つは真空論、戸締論で、力の弱い所には武力をもって出てくるだろうということで、共産主義政権はア・プリオリに侵略的だという前提です。この二つの前提がすべての政策の出発点だった。

ソ連側から見ると、いま埴谷さんが言われたように、根本的には「資本主義である限り帝国主義戦争は必然的である」という考えがあった。これはダレス氏の戸締論に該当するので「もし力が弱いと攻めて来る」ということ。もう一つは「資本主義は必然的にひっくり返る。恐慌は避けられない。結局崩壊するであろう。」というこれはダレス氏の「共産主義政権は弱い」という説に該当する。

その考えを、ソ連側は第二〇回党大会で否定した。米国側はキャムプ・デイヴッドではじめて公式に否定したといえるのではないかと思う。

私は六〇年代は、共存と緊張緩和の方向に進むと思う。しかしそこには競争がある。競争の舞台は低開発地域になるだろう。その地域で民族主義がいちばん激しい形をとるのは、黒人アフリカ、両体制の競争に大きな意味をもってくるのはインド、じゃないかと思います。

第２回

帝国主義は変ったか　現在の指導者　大半は死ぬ

埴谷 雄高氏

政治の変質

埴谷
帝国主義の側から見ると社会主義国との対立と植民地の抵抗という二つの問題があって、それだけでも共存という言葉を文字通り共存という意味に理解するとたいへん違うんじゃないかという気がしますね。この共存という曖昧な言葉は、六十年代は植民地の抵抗増大によっていよいよ曖昧になるでしょうね。つまり、帝国主義も社会主義も植民地もさらに変質する。卑近なことからいえば、スターリンが死ぬと忽ち内部でスターリン批判が起る。ダレスが死ぬと忽ち政策の転換が起る、ということが現実にあったわけですが、六〇年代には現在の指導者の大半は死んじゃうんじゃないか。たとえば李承晩やアデナウアーはほとんど確実に死んでしまう。（笑）

加藤
ああ、そうか。十年たてばね。

埴谷
十年のうちには、実際死ななくても政治的生命を失っちゃうものも出てくる。

加藤
医学的にみてそうなるでしょうね。

埴谷
毛沢東にしてもフルシチョフにしてもこれから十年政治的生命があるかどうか予測はむずかしい。そして、あなたの言った東南アジアから中近東、アフリカにかけて、五〇年代にエジプトのナセルが現われたごとく、われわれの予想しない所に何者かが現われて新しい要素を作るということも考えられない訳ではない。それは帝国主義がどの程度の変質をそこで強要されるかということになる。安保条約の十年ということは、基本的に言えば、アメリカ帝国主義がアメリカ帝国主義として十年同じでありたいという願望を表明してるってことじゃないかと思うんですがね。

加藤
アメリカの帝国主義っていうのはどういう意味ですか。

埴谷
帝国主義も二十世紀後半は変化していて、二十世紀の前半世界を支配したイギリス帝国主義を肩替りしたのはアメリカですね。イランのモサデグに対するクーデターは象徴的な事件で、イギリス帝国主義の敗北とアメリカの肩替りを告げている。また、あとえばレバノンにアメリカの航空母艦をもってゆき、しかも何万人という兵隊が上陸するという事態は二十世紀の前半ではおそらく考えられなかったんじゃないかと思いますね。

加藤
　それが第二次大戦後にはアメリカによって置替えられたというわけなんですね。十九世紀の英仏の帝国主義とおんなじ典型的な帝国主義はなくなって英仏の植民地との関係も、かなり性質が変ってきたと思う。しかし米国の一種の肩替りを帝国主義と呼ぶとすれば、かなり言葉の意義拡張になるんじゃないでしょうか。米国が肩替りしたっていうことは、元英国植民地を日本が奪い取ったという意味での植民地戦争の結果の肩替りとは、大分ちがうと思う。米国の肩替りには第一に政治的な支配があんまりない、経済的支配が圧倒的だということ、政治的要素としては反共主義ですね、反共主義は帝国の膨張とちがうと思う。それから国内の経済的な条件もだいぶ違うんじゃないかと思いますね。米国の国内市場は大きく原料も大抵自給できる。これは十九世紀の英仏と全くちがう条件でしよう。

埴谷
　ぼくは加藤君並びにフルシチョフとは違って、これは帝国主義本来の形を拡大しながら変ってきていると思うんです。ということは、商品市場としての植民地という形はやはり持とうとしてる。ただその内容はあなたのいうように原料をそこから持って来て商品として出すという形じゃなくて、軍需的な生産物までそこへもってゆき、いわば帝国主義の出店をそこに作る。つまり、商品市場兼要塞を作るところの帝国主義に変化している。

加藤
　要塞は反共のためでしょう。

埴谷
　そうなってますね。それが、昔のイギリス式の商品市場としての植民地ではなく、最前線の防塞を作るという拡大された帝国主義にアメリカがなってることを示してるんじゃないですか。

加藤
　反共主義っていうのは一種の国際的な政策でね、米国の主権で膨張ではないわけだ。

埴谷
　しかし、植民地を肩替りしたという意味はそういう軍需的な生産物を出してる国まで含む体系であって、ぼくはフルシチョフがいうように軍需生産をやめてアメリカ資本主義がそのまま成り立つかどうか疑問なんですがね。かりに日本とかトルコとかいういわば前線の要塞がなくなって、軍需産業が転換するとしたらやはり資本主義として危機に逢着するんじゃないかと思いますね。つまり世界経済の強力な環としての帝国主義が完成したのはこのアメリカ方式で出来上ったのであって、そういう意味ではイギリス帝国主義は原始的な形だったのですね。それがはっきりしないと今の安保条約改定がなぜ十年の期間を持つのか、アメリカの考え方の奥が分らなくなるんじゃないですか。

第３回

保守化したソ連　平和産業へ　転換は可能か

丸山 眞男氏

軍備の全廃

加藤
　ぼくはなにもフルシチョフ氏のいったことだけを信用するわけじゃないんだけど、アメリカが軍需産業をやめることは、経済上できないはずだという議論を支持できない。ぼくの知識上、能力上、想像力上、それがまちがいかほんとうかをいえないわけですね。（笑）ちょっとむずかしいんだな、それをいうのは。ぼくは経済学者じゃない。

おそらくこういうことなんでしょう、軍需産業の経済的な意味は、政府が作りだした非常に長い契約に基づく大きな消費だということである。そこで問題はそういう大きな市場を政府が軍事予算でなくて作ることが出来るかどうか、アメリカの予算の半分ぐらいに該当するような大きな市場を軍需でなくできるかという問題が一つ。

もう一つは、第二次大戦後になって資本主義の発展の成り行きの結果、景気循環を安定化するために軍事予算だけでなくいろんな装置が出来た。それは幾つかあってたとえば、消費者信用の極端な増大というようなこと。（いわゆる *built-in stabilizer*）そういうことも考慮しなければならない。第一、軍事予算を減らして行った場合にどれだけ別の予算でおぎなえるか。第二、おぎないきれぬとき、どれほど *stabilizer* がはたらくか.。話は少なくとも二段構えですね。そいつを計算しないと「そう思う」というのと「そう思わない」というのでは、要するに水掛論なんですよ。

埴谷
　われわれは安保条約の反対運動をやっていますけれども、これは世界史的に見て大変なことだということを強調しているわけですよ。なまなかでは押し通せないだろうと。

加藤
　そうでしょうね。なかなかでは通せないですね。

埴谷
　だけど、二人だけで話しちゃいかんですよ。（笑）丸山さん、どうですか。

丸山

　ぼくは今日はエキストラだから……。（笑）いままで出た問題に付け加える点だけいいますと、ぼくもね埴谷さんとちょっと意味が違うけれども、平和共存という考え方が、これまでと少し変ってくるんじゃないかと思うんですがね。つまり平和共存は両陣営の対立という現実の中である一つの生き生きとした意

味を持っていたわけだね。その意味ではそういう条件は今後も、もちろん続くわけだけれども、両陣営が両極化して一触即発の状況にある時に平和共存が理念であって、しかも理念として非常に生きた意味を持っていたようなエネルギーっていうとおかしいけれども、そういう理念的な指導性っていういものは、平和共存がだんだん現実のなかに根をおろして行くにつれて薄れて来るんじゃないか。これが平和共存の逆説的な論理だと思うんです。少くも戦争直後はアメリカ以外の資本主義国の被弾が甚しかったわけですね。従ってマーシャル・プランその他一連の援助で強力なアメリカ経済力のテコ入れによって西欧陣営は極端に言えばやっと持ちこたえてた。それが同時に共産陣営に対抗する政治的な意味を持っていたと思うんですよ。だけど、その条件が第一に変ってきた。他の主要な資本主義国の生産力が復興し、つづいて技術革新と相まって生産力が急ピッチに上昇してきたんですね。むしろヨーロッパのイギリスなりドイツなりに比べてアメリカの生活水準の高さ、したがって高賃銀というようなことがアメリカ資本主義にとってマイナスになってきている。そこへヨーロッパの内部ではヨーロッパ共同体というような動きもあって、高度資本主義諸国の間の経済競争は非常に熾烈になってくる。その意味では戦後のアメリカの資本主義の圧倒的な優越性という大前提が変ってきて、他の西欧諸国が経済的従属性を脱するという契機が一つ出てきてる。それがどういう政治的な意味を持つかぼくにはよく分らないけれども、それは少なくとも戦争直後から五〇年代にかけての支配的な条件とは非常に違っている。それとソビエト圏との関係の相対的な安定というものをひっかけて見ると、東西貿易っていうことが非常に重要な問題になってくるでしょう。むしろ新しくひらけて来る共産圏の市場というものを目がけて資本主義国の間で猛烈な割り込み競争が始まって来るのじゃないか。それが一つの新しい問題じゃないかと思うんですね。だから共産主義陣営対自由主義陣営という二分法だけではその点でも解釈できないもんだいが出てくるんじゃないか。

埴谷

それはある。

丸山

それからもう一つの問題はね、ソビエトが社会主義圏内におけるいわば「保守的」立場に立ったということがハッキリして来る。これは国内の革命過程というものが一応終って、さっき言われたように、もう経済体制的な意味でソビエトが資本主義にひっくりかえるということを本気で考える人は大体なくなったと思うんですよ。そういうことと同時に、ソビエトがアメリカと匹敵し、ある点ではアメリカを凌駕する押しも押されぬ世界の大国になったということと、核兵器の飛躍的な発達によっていわば世界平和を維持する巨大な責任がソビエトにかかって来たという、この二大条件によって、ソビエトは今や好むと好まざるにかかわらず世界政治の問題についてある保守的な立場に立たざるを得なくなった。ところが、あとからついて来る社会主義国家はまだ混沌とした革命過程にあるし、これから工業化を猛烈にやって行かなければならない。その周辺における政治的状況は必ずしも安定していないという、いわば流動的な過程にあるわけですね。そうするとさっき言われたように、先進社会主義国家としてのソビエトとあとからついて来る社会主義国との間に一つのむずかしい——必ずしも基本的矛盾とは言わないけれども——いろいろな政治的な紛争が起ってくる可能性があるんじゃないか、という問題が一つあると思うんですね。

それからもう一つの問題は、ソビエトについて言えば、社会体制が生産力の非常な向上と同時に安定してきて、これからは消費革命が進んで行く段階だと思うんですが、このスターリン時代と基本的に違ったソビエト内部の社会体制の安定化と生産力の発展が必ずしもまだ十分に、それにふさわしい政治的な表現形式を見出してないと思うのです。社会体制は安定して、いよいよ確固としたものになってるけれども、しかしそれに適応した政治形態は何かということについては未解決である。

加藤
　そりゃそうですね。

丸山
　それではアメリカ資本主義の平和産業への切替えがスムーズに行われるかどうかという問題だがぼくにはよく分らない。まあ強いていえばちょうどお二人の中間ぐらいな考えかな。アメリカは一九二九年の恐慌からマーケット・オペレーションについてはかなり学んでいるし、政府の強力な政治力を発揮すればあまり大きなショックを防ぎながら転換を行うことが出来るかもしれない。しかし、なんと言ったって自由企業が建前ですからね。

加藤
　要するに、そういうことが決して出来ないと言い切ることは出来ないということだ。すぐ出来るんだということはもちろん言えない。しかし、徐々に変って行く可能性は一応考慮しておかなければならない。

第４回

勘の鈍い米、ソ両国　新しい軍備　市民の武装に

加藤 周一氏

交流の問題

丸山
　今アメリカの海外援助や各国における基地の設置は、そこの市場を直接経済的に搾取するよりむしろ軍事的戦略的な目的ですね。経済的には割が合わない投資もそういう戦略的な配慮からやるっていうことはいえると思うんですよ。

埴谷
　あなたのいう、資本主義圏と社会主義圏との貿易の交流は確かに予想されますね。そして、これはいろんなかたちで深く影響すると思います。けれど、おもしろくいうとね、アメリカは南米や日本に対してばかりでなく世界中で非常にカンが悪いんですね。ところが、ソビエトもカンが悪いのでバランスがとれている。これが双方とも良くならないですかね、互いに交流してるうちに。

丸山
　交流と言っても、ソビエト圏はせいぜい共産圏の内部とか低開発国への経済援助はやるけれども、資本主義国にまではどうかな。むしろ切実なのは資本主義国家の側で共産圏のこれからますます開けて行く広大な市場を目当ての競争ですね。

埴谷
　ぼくはアメリカのカンの鈍さもソビエトのカンの鈍さもあと十年ぐらい直らないというカンがしているんですが、これは単なるカンです。

丸山
　安保について言えば、ぼくはちょと埴谷さんと違ってね、むしろ五〇年代の冷戦の基本的条件がまだなくならないといういわば堕性からアメリカはああいう形で日本を押さえているんでね、したがって条件が変ればアメリカの政策が急転換するということは十分考えられる。

埴谷
　逆に条件の変化がより緊張を増すということは考えられないですか。たとえば現在の人民公社は今後十年のちにはその生産力の点からいっても飛躍的になると思いますね。

丸山
　なりますね。

埴谷
　とともに軍事的な面からいっても思いがけないほど増大するんじゃないですか。そういうことは条件を緩和するんでなくて逆に緊張させるような形になると考えられるんじゃないですか。

丸山
　と同時に、それが従来の形でアメリカ対ソ連、アメリカ対中国という対立の中にほかのすべての対立が第二次的なものとなっちゃうかどうか、そこなんですがね。なるほど中国とアメリカとの緊張を増すかもしれないけれども、他面ソ連と中国の間、あるいは中国とインドとの間にもいろいろむずかしい関係が生じて来るかもしれない。中国の地位の躍進ということは従来のような西欧国家群対共産主義国家群だけの問題じゃなくて、それと交錯してむしろ世界的な問題になるんじゃないかという気がするんですね。

埴谷
　話題を変えると、社会党に国民政党か階級政党かという問題がありますね。西独の社民党がつまり階級的な比重を弱めたというようなことがあって、これはどうでしょう…今後十年において社会党と共産党とは。（笑）

丸山
　その前にね、軍備っていうことはどうなるか分らないですけどね、ぼくは中途はんぱなものがなくなって上昇と下降の過程をとると思うんです。つまり人民公社的な形は下降なんですね。根本は民兵制度で、マン・パワーというより人民そのものを武装させるという考え。これはどんなに戦争技術が発達しても強味を発揮できる。市民の自己武装はフランス革命からある考え方ですね。本来、国民皆兵だてそういう意味も持って出て来たわけですね。結局、徴兵制という形で上から利用されたけど。人民の自己武装、そういう方向をとる限り、プリミティブな武器でもいいわけですよ。それから他方は非常に高度な核兵器と、その中間の軍備はだんだん意味を失っちゃう。

埴谷
　日本は中間の段階。（笑）

丸山
　民兵制度は二つの意味があるんだ。外国の侵略に対して人民が戦う意味と政治権力に対して人民の抵抗権をいざという時に発動する意味があるけれど、日本のかつての徴兵制度になるとあとの意味は全然なくなる。その意味で民兵制度と全然違うでしょう。

加藤
　今の日本では鉄砲をうちに持って来たら危ないな。（笑）

丸山
　ぼくはむしろ今のような軍備をやる位なら鉄砲かピストルをみんな配れという主張だな。

加藤
　そんなことしたら新宿の裏なんかで危ないよ。（笑）

丸山
　そういう連中だって良家の子女を襲ったらいつ撃たれるか分らないということになると慎重になる。（笑）

加藤
　愚連隊が娘を襲うとおやじが二階から鉄砲で撃ち倒すというわけか。

丸山
　それがいわゆるまる裸論に対するこたえにもなるんですよ。万一侵略された場合、国家の形態を守って抵抗することは今は不可能ですよ、いくら軍備しても。しかし占領されたって、もし妻を犯され娘を犯されるというような危険の場合は、ピストル一つずつ言えに持っていても相当の抵抗ができますよ。

ともかく豊臣秀吉の刀狩りと人民の抵抗権の伝統の弱さとは関係が大いにあるね。しかしそれでも徳川時代でさえ平民は一本差していた。武士は平民より一本しか多くない。そりゃ組織された軍備にはどんなことをしても勝てないよ。しかし文字どおり自分の生活を非常事態において守るということにおいちゃ全然無手勝流と違うんだ。しかし、こりゃ暴論だよ。（笑）

埴谷
　いや、おもしろい。

加藤
　おもしろいね。

第５回

革命への現実主義　イデオロギー　多様化は当然

思想の変化

編集部

さっき埴谷さんからちょっと西独の社会党の問題が出たんですが、帝国主義の変質と、ソビエトでの政策の変化の可能性っていうことと同時にイデオロギー上の変化、二つの陣営での変化ということは考えられないんでしょうか。

加藤

一番最初、埴谷さんの言われたような、資本主義国が必ずしも戦争を好むんじゃない、帝国主義戦争は必ず起るんじゃない、不可避じゃないという、それより前の話になるけど、革命にいろんな筋道がある。そういう考え方はスターリン時代の正統からは変ってきてる。それから米国の正統と言えるかどうか分らないが、マッカーシーの時代の反共主義からは米国も変ってきてる。しかし、それが思想の本質の変化に通じるかどうかということはいえない。おそらくそういうことが十年間に起るということはむずかしいと思います。しかし相手方のよって立つ地盤をなんとか自分の体系の中で考慮する。相手の考え方を単なるまちがいとして無視するんじゃなくてそれをなんとか考慮するように、便宜的な工夫をするんじゃないでしょうか。それから単に便宜的なもんじゃなくて、もっと本質的な変化が出てくるかも分らないけれども、そうはなりにくいんじゃないですか。出発点が根本的に違うから。

埴谷

修正主義ということがいわれるが、イデオロギー上の多様性はこれからも必然だと思いますね。というのは、社会主義が今世紀ソビエトに打ち立てられて発展したことによって私達が知った重要な要素は、与えられた現実の上に社会主義を建設しなければならないことを実感を持って悟ったことだと思いますね。それまではとにかく、革命を起す、社会主義を打ち立てる、忽ち共産主義になる、というふうに考えがちだったが、そうじゃなくて、ソビエトはソビエトなりに、中国は中国なりに、東欧は東欧なりに与えられた地盤においてスタートする、その社会主義形態もさまざまである、ということが実感として分ったわけですね。そういうさまざまな形でスタートをすればイデオロギーもさまざまな達を取るのは当り前ですね。ソビエト流の社会主義、ポーランド流の社会主義があって不思議はない。その一番いい例はユーゴという国で、ソビエトが一国社会主義を打ち立てたとまた違った形においていわば平和共存というものの見本のような実践をやってる。それが一つと、それからもう一つは、これは第二次大戦後ビルマとセイロンにとにかくトロツキストの政党ができ、ときには政権に参与しているということはこれまた新しいイデオロギーの多様性の形だと思います。日本においても全学連はトロツキスト的だと言われますけれども、セイロンやビルマのことを考えてもなんら不思議でもないことで、今後十年のうちには、キリスト教のなかでどんどん分派が出来たようにかなり出るんじゃないかと思いますね。（笑）

加藤

仏教もそうだな。ずいぶんたくさん出来たんだな。

丸山

一般的に言って、ソビエトがさっき言った意味で保守化したということ。これは保守化したのが悪いっていう意味でなく、ぼくは世界平和という関係においては保守化した方がいいと思うけど、とにかく保守化したということが、トロツキズムの新たな擡頭をうながす一つの契機になっていると思うんですよ。結局ソビエトは堕落して、生き生きした世界革命精神を失った、というわけだろうと思うんだけど、ともかくソビエトがそういうふうに変って来たということで国際的な社会主義運動っていうのは二つ非常に危険な問題を抱え込んだ。

一つはソビエトが従来のような形では世界の革命運動に対するリーダーシップを独占できなくなって来たわけでしょう。戦前派コミュニストのようにソビエト共産主義のオーソドクシーを全然疑わないいわばそれを前提にしてたコミンテルン日本支部的な発想はなかなか今後も抜けないとは思うけれども、そういう発想から出発した革命運動がだんだん現実からズレて来る。これはアジアとかその他の流動的な地域におこる社会的政治的事件に対してソビエトがどういう態度を取るかというと、必ずしも革命的なイデオロギーからでなく、どうしたら戦争にならないかというリアル・ポリティックスの上から考えるようになっている。だからそれは必ずしも世界革命派を満足させないし、いや、現地の共産党の立場を窮地に追いこむような場合も多くなる。かといって現実に出来ているソ連の体制を、あんなものは社会主義じゃない、インチキであると頭からキメつけて、それと全く別にあるいは極端にいえば、それを攻撃することで社会主義革命をやって行こうっていうのは、それこそ非現実的でね、トロツキズムというものがしばしば現実には反動的役割を果すのはそういうところから来てると思うんです。そういう両極のむずかしい問題があるんじゃないかな。一つはソビエト第一主義が崩れたということ、にもかかわらずソビエト社会主義っていうものに対立してあるいはそれを否定して社会主義革命を考えたって、それはユートピアだっていうこと。

加藤

ただ、ある種の流動的な地域では、かなり力の強い革命運動がソビエトと直接結び着かないで出てくるということはあり得るでしょうね。

丸山

ただ後進地域の革命運動っていうものが非常に複雑でね、従来のようにコミュニズムのイデオロギーによって統一されるかどうか疑問だと思う。たとえば宗教が大きな比重を占めてる所だと一体これまでのマルクス主義の宗教理論で実際やって行けるのかどうか。

加藤

それはイデオロギー上の純粋さというか、マルクス主義の今まで言われてたことを額面どおり受取るのでなく、もっと経済政策上の技術問題として社会主義建設を受取る形が一番支配的になってくるんじゃないでしょうか。するとイデオロギーの面では自由だということになる。そういう訴え方が一番強くなるんじゃないか、中東からアジアにかけて。

第６回

憲法は護られるか　問題のカギ　中間層の動向に

日本の展望

編集部

ここらで締めくくりとして日本の問題を……つまり世界の動きと日本のギャップは明治以来あるわけですけれども、そのギャップがせばまる方向に進むか、ますます開く方向に進むか……。

加藤

ぼくは明治以来ないと思うなあ。（笑）これは大ざっぱな意見だけど、丸山さんに征伐されるか分らないけど、明治は十九世紀の末でしょう。植民地分割の時代がまさに終りに近づいたころで、ちょうど日本は極東にまで帝国主義の手が伸びてたまさに境の時だった。ほかの所で植民地化は進んでいたけれども極東ではこれからというところで、要するに日本の選び方っていうのはあの時代としては、世界は植民地を治める側と支配される側と二つに分れていたでしょう。どっちになるか。もし植民地帝国にならなければ植民地にされたんじゃないかな。明治政府の取った方向はそれ自身は世界の方向に合致していた。ただ、世界の方向に急速に無理をしながら大急ぎで追いつこうとしたということじゃないかな。ところが、そういう情勢は途中から変ってきたわけですね。少くとも第一次大戦以後。そうなってもまだ同じ形で進んでいた。最後には最も古い形の極端な冒険的な形の帝国主義で伸びて行ったから潰された。それが一番典型的に現われたのは一九三〇年代からの中国侵略だと思う。一九三〇年代には軍隊を送って植民地を分捕ることはだめだということぐらい分ってなければならなかった。「満州は生命線だ」ということは間違いで、その理由はあれを植民地獲得の戦争として見れば時代にそぐってなかった。途中からズレちゃったんじゃないかと思うんです。初めの時はあれでいけなければどうすればよかったというと、これはちょっとむずかしいんじゃないか。

埴谷

今度の戦争で与えられた平和憲法ができて、それを為政者の側で擁護したのは砂川事件における伊達判決にやっと象徴的に現われてますけど、今後十年この憲法をいかに具体的に活用し運用して行くかという問題があるわけですね。これはどうでしょう……憲法は永遠の死文になっちゃうか、それともときどきは生きて発動するかどうか。（笑）

丸山

憲法というよりもね、憲法もそりゃ成立の経過から言えば与えられたものかもしれないけどね。憲法自身が戦後のいわゆる民主的解放のシンボルなんで、その意味では憲法それ自体よりも根本的には戦後の民主的な改革というものに対する評価っていうことに帰着するんだろうと思うんですがね。保守勢力の方が「革新的」だという逆説があるが、いわゆる「保守」勢力は現状が行過ぎだという基本認識に立っている。行過ぎだからこれをチェックしよう……彼らが見て正常はどこか知らないけれども、ともか

くそれを戻そうとするわけでしょう。行過ぎと見るか、それとも行過ぎのように見えるのは実は行足りないのか表面的に行過ぎ的なものがあるのはデモクラチックな訓練が足りないからそうなるのか、ということで基本的な考え方が違ってくる。

埴谷
　憲法擁護の三分の一の線は今後十年は確保されると見ていいわけですね。

丸山
　むしろ現在の地点で言えば、憲法という法的なわくっていうか、それが第一義的な問題じゃなくなってるんじゃないか。現実に三分の一をちょっと割ったとしますね。そうすると政府はすぐ憲法改正をやるかというと必ずしもそうじゃないと思う。というのは、一つはだんだん憲法を抜け殻にして行くことが出来るからだけれども、そうばかりとは言えない。三分の一を獲得するまでに上って行ったその基底にある力をバカでない限り無視できない。だからその意味では憲法改正は直ちに現在の争点にはならないと思うんですよ。むしろ実際に社会に根を下した民主的な諸権利というものの運命にかかわってるんじゃないか。民主的な運動の蓄積された力にかかわってるので、三分の一かどうかということはただその反映としてのみ意味があるんじゃないかと思うんですがね。

さて、それじゃそれをもっと前進させるにはどうするかということはいろいろな問題があるけれど、平凡なことは中間層を獲得しなければ話にならないですね、いわゆる新党でいう意味と違った意味でね。（笑）

加藤
　そうなんですね、ぼくは挟み討ちだと思うんですよ。社会党は中間層を獲得しなければならないということは万国共通。英国でも労働党が負け、西ドイツでも社民党がだめになるというように、そういう意味では米国以外の資本主義諸国の立直りと関連し、戦争がないということと現状維持の空気があって、だんだんそうなって来た。それにヨーロッパの国の場合には福祉国家。ある程度賃銀収入、月給収入の平均化があって、そのため二〇年代、三〇年代……ことに二〇年代に社会党が一致して掲げた「貧富の差を直そう」という旗じるしは直接ナマに響かなくなったという二つの条件ですね。日本では二〇年代のヨーロッパと同じ条件が残ってるわけで、それは今のヨーロッパと違う事情だと思うけれど、しかし都会の中間層はある程度保守的なものになって、その点ではヨーロッパに似ている。

丸山
　広汎な労働者階級自身が中間層だからね。

加藤
　気分としてはヨーロッパに似た状態を呈してるんじゃないかな。どうやって中間層を獲得するか、その困難が一つ。一方ヨーロッパと違ってもっと貧乏な面があるのは、どうなるか。そこにはいわゆる共同

体的な意識があって保守党に投票している。これは一般的な問題じゃないわけですね。日本に特殊です。困難が二つある。その両方を破らないと動かないんじゃないかという気がする。

丸山
　けれど他面、日本経済の底が浅いから、中間層はいつなんどきラディカルになるかもしれないという面もある。ただしそのラディカルは突風的なものだからどこへ行くか分らない。そこに革新政党のリーダーシップの問題がある。

編集部
　新しく出て来る若い世代はどうなんですか。革新のほうに行くか、中間層のほうに取られたらだめということがあるでしょうが、十年たつと今の指導者が死ぬっていうことがありますね。だから若い指導者が出て来た場合のこととか、それを支持する……。

丸山
　プラスの面でもマイナスの面でも戦争の痕跡が消えて行くということね。

埴谷
　その消え方がやはり今までより遅いですね。原爆があったために戦争反対の気分はドイツの前大戦当時より長く続いてるんじゃないですか。これは幾らか明るいですね。

加藤
　前の時は永久平和っていうことだったけど、今度は戦争が済んだとたんに休戦みたいなものだからね。

丸山
　イデオロギーが権威を失って、その代りにエネルギー主義みたいなものがでてきた。（笑）

埴谷
　エネルギー主義はプラスとマイナスと両方の面を持ってるからね。（おわり）